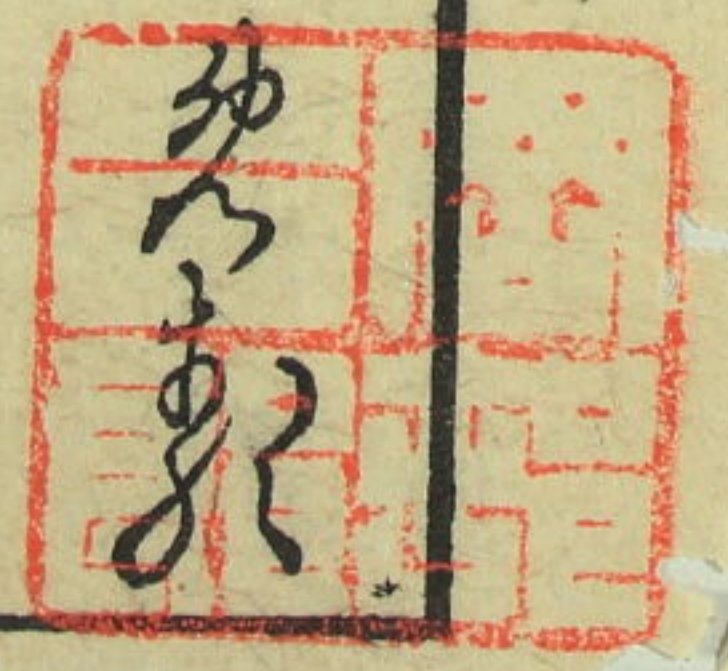


63



いし一年、溝口竹高うらあ
をいすむらふらう、那書世々、廣
的もく、氏をり、入るの杖と
横とと、あつと、重あつと、あり
同安うんやう、いすもや、系、年、の、り
あ、り、う、を、あ、り、の、り、を、り、



○亭

八解 廿二

付合不致 廿四 用付 日

うろ付 廿五

あふの字 日 ちあふ 廿六

同字 日

あふと借る 日 辨也 廿七

白の二白 日

う合の字 廿九 をさまたお久城大字に書

祚祓三並 迷信の句 四十六 右におか

人福取不 夜台水色の句 四十七 右におか

四季の句 四十九 右におか 日増補 六十九

已上

凡例

○本書とて海峽の宮の沙汰ハ御筆に
 色と白とありて是より之 貞徳公初とて後
 高野の本食真山上人と同くうら
 くらぬ 其不和の子細 別記よ書之 被上人う作せる連
 歌 無言抄を法にのこし請り給へり御
 筆の中にも被抄の旨を強破せぬ

所載くゆりてそて文西しゆりおあくそな
りて見ゆべき書也且彼半の貞徳翁
存牽りゆし草移ありてか滅後よ其
徑少く校言を多く板ゆせとて終
衍文重出錯簡多く師家の口授を得
たりと其ゆゑなむ家夏あしとて
違へる旨はゆりのまゝ此書におせ

定阿の師説しきとてひと改考るもの
○作者の料簡よく書き違へたりとて
あるれとて師説又の御筆の正説と押
あてて阿とあ且予か御案とて係ゆ
○西季の朝の肖菊翁の滑稽を難後よ
ゆりてそて事の違へるとはあ文字の
あやまり等とて又年未予か御案

結んば氷をくしんば氷を其の氷よりて
あまの氷をくしんば氷を其の氷よりて
いかに氷をくしんば

○ 氷の白

流布の氷をくしんば氷を其の氷よりて
あまの氷をくしんば氷を其の氷よりて
いかに氷をくしんば

切字の氷をくしんば氷を其の氷よりて
あまの氷をくしんば氷を其の氷よりて
いかに氷をくしんば

名月の白も 正しくして地盤形をさす
の思はる十を杖のよとさあぐら十を杖の
事とてひて思ひまうけしれを惜よ名月
の一向と云候一是平白ちるべ一業言れ
後白ハ言ゆへ年とれむとこと本を
候と云はる言と物とらふに影一遠入り
とあるべ——

○おちちの返句

先年あよとむし人の業目よ浦のらるよ
ゆとせられたる是ホハ流きよよむし人のりな
らばり哉と糸の人の白よハ熱うらぬあつて孫
一とむし人のりなとてハまゝに取あをぬと
まゝとむし人のりなとてハまゝに取あをぬと
まゝとむし人のりなとてハまゝに取あをぬと
まゝとむし人のりなとてハまゝに取あをぬと

下の上の七のどとちまつか毛ぢうつわしたま
 見とゆふのぢあともなれう是とて巧まはじ
 物どて白より地のもりてよぬををあり
 自身の事にしてよぬにぬおのりて
 自他お分をゆかものあまのむかしに合ふて
まのむかしに合ふて
 付肌よりかきとど

○名とてまのむ

あつたのむはゆふのりう名とてまへてまを
 視ひまをりてまよぬてぬとてたてて
 又まの苗名をてりて同書へいあまよま
 よりよまのりて名号の字と松川をぬとて
ねる水とて
 又一向に名号と申とてまのむかし
まのむかし
 の方へまのりてまをぬとてかぬあひて是とて
 料名とて其一人の名とてまのりて其是れ

又宗鑑の姿とくも世と感思つこと
作られぬ宗鑑一劫の名義と云つべし
一機は思ふゆゑ

○及ぶの句

次はのめむか認はくしものま
るるるるるるるるるるるるるる
るるるるるるるるるるるるるる
るるるるるるるるるるるるるる

礎とのを文字よの土筆とあつたは
くししししししししししししし
礎の字はとあつたはししししし
とあつたはししししししししし
しししししししししししししし
と後名と附古史と書てしししと
かひしししししししししししし

白とあまのちかぬしにふくし

○腸白

腸白のたしらぬしにふくし
入るあせんしすれを發白は仕務の
あり發白はあはて踏ふらう路たし
とふ大まと腸白のし獨の飛ぶし
味とあまのちかぬしにふくし

獨といふは客よ發白とせ
りまといふは發白の客の
のたしとあまのちかぬし

○夏熱の腸

夏熱の白らきある事あり
腸とて目出な
るのちかぬしにふくし

かゝるものも齒持くしやうやの甚下方の
かゝるものもくしやうのひきまきさの敷通
吟々ほらひきまきさのひきまきさの
かゝるものもくしやうのひきまきさの敷通
ひきまきさのひきまきさのひきまきさの

○表八白

出へ向めあつていへて極へんかゝるものも
かゝるものもくしやうのひきまきさの敷通
ひきまきさのひきまきさのひきまきさの

かゝるものもくしやうのひきまきさの敷通
ひきまきさのひきまきさのひきまきさの
かゝるものもくしやうのひきまきさの敷通
ひきまきさのひきまきさのひきまきさの
かゝるものもくしやうのひきまきさの敷通
ひきまきさのひきまきさのひきまきさの

○待無

東らうりより作紙に表意毎常一名新等と

○素秋スアキ

月と素秋と素秋とてむしうくも親をけ
ましと十一箇條同言くくうく半言く始り
所詮同言く五るまをたはむのしうく一
むしう

○素秋

素秋の句五るまはむのしうく一

二のめと素と結る春物と其次是非と
素と附る時春とる素とるのち次一
春と捨る素とるのち一素と捨る素と付
海とるまを素とて始りゆの秋と是の句
又素とる句一白とて次は素の春秋とる續
ゆの秋と素秋と捨る素の句とる素と
素とる句と素と捨る素の句とる素と

かゝる色白のふりかへる各目なる
は傳へり候あり

○發句人へ

花四本の内一本は是地とも發句人
さへも事なるまじし事也十箇條同言
ある一冊にれた器とて書かへり候
まのふりかへるもむらさきの器の
まのふりかへるもむらさきの器の

○舉句

舉句はつねにさきとふりかへるの
て今もさきと満座とさきとさきと
と無負かるもの之れ筆を空のりまて
憎恨と其恨むにたぐひあり候もの
人のふりかへるに兼てあつては
是金言なる

○句數

先宗匠より入養より句とれり
毎二句より名前の裏に句都合十句
是れより其次の人より十句八句
又二句ありて未だ其の裏に句
とて宗匠の句と判りて其の
所よりかりて其の句と判りて其の

ては所入の語ありて人ありて其の
おのりりて其の句と判りて其の
る其の句と判りて其の句と判りて
宗匠より其の句と判りて其の句と判りて
ら其の句と判りて其の句と判りて

○執筆の句

初一巡り終りて其の句と判りて

是れ其の句と判りて

を以て執筆者の付くは今の筆跡の人数
の代りとする事なれば是は略して執筆
の人は付せても又筆句の名を以て
して執筆とすとの暗の義を以て
執筆の名として扱執筆の巡り
中へ後へ句の義を以て扱執筆の
細らむ

○非衆ヒシウの事

兼て定むる人数の非は遠客の人数
の出入りありて執筆の句を以て其次
の非を以て是と非とを非連とす
非連の義を以て又連衆の用あり
とて満座の席とて非衆の非衆
の宗匠の事とす

○八體

連哥ろ付令よ八辨十二体廿四辨單八
辨八十辨をこゝに處へ分ち四せり辨譜よ
此八辨を所要とせしむるに處へる辨は八辨
より分ちあるある一其八辨は四付
風情付詞付遠付心付お射付埋付之
平付引白

東印二月とかりん

端居り色秋と捨とくおん

四々々 物さし終るる醫みあり

歌まうてあおちとくをるる

風情付 とありがけとをとるる

家まぬと程のくををある月

詞付 かにたよありてよまの骨

破らちる色園の形とる

○

○

遠付

あつひりよまのよはるいり

十又秋の月よそむのいんじ

心付

月よそむのいんじ

命にうゝあふくといふ

お針付

まときあつひり

心付のあつひり

埋付

穽さる毎ういんじ

掘渡と程ちりあつひり

右八の付といふと師付をいふは

書付にいふは上の上付といふは

○付合不おはるのい

右の付といふは

あつひり

あつひり

あつひり

野掛の美しき萩とるお

紅葉よはら目まらぬまにかつむ

前の白きあはらお海しとらうされも唐と
りかゝるの白いおお悪くはら白い女つむり
野掛の神と付されと海おとる初よ女の
風情の如合とてむ

○用附

おらと神ありてこそ用と付るこ

意よはらとらうようむらうむ

妻よりを妻よはら引勝と

引らふららの用おれとあはれとあら

○うし後付

後付のお白に付白のまはらと後からる人
の如くしてゆめあるはよじら付らふと
酒をよとて金をうぬのあがむ

これを縁藤よけ臺の

見六付白よあると海色の

○前白の雪

是六結付んと思ふ海色の
と付る事一初字の

たまある人

おのれ梅よ

是とあるの海色の
海色の

○前白よある白

是六結付られたもあ

きかしく村色

縁の

山の白よ

○同意付

是ハあると付白也何一を云ふと云ふ事
其の表もあつて何くかして
其上の月もあつて何の事
付る也何くかして何

○兼白と借る白

是ハあると付白也何一を云ふと云ふ事
其の表もあつて何くかして何

下白は兼白と云ふ事

蠟燭の火と云ふ事

是ハあると付白也何一を云ふと云ふ事
其の表もあつて何くかして何

○論廻

是ハあると付白也何一を云ふと云ふ事
其の表もあつて何くかして何

とも程初字のうも引よのや成るん
 とはこちと筆とあつて書きたし
 ゆるりり此并りて二跡のたきも
 魚首の将り思ひと是のこらも
 にかりりりりり

指合の抄法



伊勢乃神名所之

非名所之委めり字
 乃新よ治と云へ

〇出る日朝時分よ非と云哉用捨付て書
 あり日朝時分よあつて書と云も書は用捨せよと云

事ある一又回け分二の續てもあるものやれは朝時
 分よけ付るも書と云へて朝時分はあつて
 出る日朝時分よ書と云ふ勿海のものよ出る日朝時
 分よあつて書と云ふはあつては書と云ふは
 書と云ふはあつて書と云ふはあつて書と云ふは

上下黒白
 軽重
 一ノ字五三去
 キウ七十三

御筆
 カリ
 是ヨリ以
 下ハ全
 上考
 七ノ〇
 百ヲサス

錦の紅葉あり

錦の紅葉ありとは、錦の葉が赤く紅葉する様子。また、錦の葉が赤く紅葉する様子。

又紅葉の錦あり

人形人あり

ほ

帆は風と

白

布袋の布と

年

破

七

知

補遺

こころんこし出とるもとある
こころんこし出とるもとある

りぬる

と親子迷懐之親とづら子とづら子と

迷懐之河とて 親とづら子とづら子とてはた
こ迷懐之るよよる个又門

親親のゆとあやこ わ能の騙人懐之 能入
懐入

はこいひも回をホ 話よ子話七るを わ能の騙人懐之 能入
懐入

か こころんこし出とるもとある

干渉ありとてさゆの 張征扣強盜海賊いりて人懐之 是亦皆
を懐分

川口浪いむ塔院ん 張征扣強盜海賊いりて人懐之 是亦皆
を懐分

のあそて 菜門とてまにまても人懐たり

人懐たり 是亦も人懐たり

はあも人 よのき餅ま之植物よ二るを

あつ蓬ぶんで雑之 食部にもよ六種あよあざ
又蓬とんこままこと上已

○ 民の竈非[○]垢所

垢所よちりし 物多一雜之

やハ秋をハ其之

け夜更し一類多し斗ハるなり
や別也之をともも書きても其之

大黒神旅あり旅も面ハ白もあ若

尚代
け報ふ

用面しこあ若也ハ金華の毛もさるるなり
旅もその毛をぬくこ一名下用

七 僧非人偏

とていりるなり

つ けしよ紅葉附てあ若

うらけしよの紙
あしよの紅葉よはしこ

僧ノ字
ハカリハ
人命ニテ
ラズ僧
字僧ニモ
ハカリハ
人命ニテ
ラズ僧
字僧ニモ

ナリハ 余ハ元名ニ僧トハカリハ人ナリニ思ス

いあ若河さし
あしぬさしにけし

八 絲宜一人偏之

非人偏神織の
官名なり

猫ノ嵐ハ

有書に難とけり等り但嫌人あり

け又言何
よもかぬ
けしよの字も一所の
海もあしけりる一とて

増あつきのあ若

納是よ豆ハ面嫌豆磨あ
とてあべ一味略十七白也

あ若ちり

全
越千七
ハ付ルモノ
ト付ヌモノ
ト付ルモノ
ト付ルモノ
ト付ルモノ

らむ 念無名なる川に白き

う じ 弦の筆付く書者 物とて判するも
の類はち多し

か の ね 思ひよ火とのせしるゆよ

お 越 嬌 ぶ べ ー 是の二句を
以てあへし 男山の石清

吹 付 て 女 吉 石清のうらなは
石の間にしる清

あふまのうらなは
清のうらなは

男の心とらふ
あふまのうらなは

く 越 舞 人 偏 之 誰 人 偏 然 燈 之 那 智 本

宮 新 宮 付 て 々 々 々 白のうらなは
大いなる付て

よ ー ー ー ー ー よのうらなは
あふまのうらなは 山 伏 人 偏 之 誰 人 偏

ま 盲 目 人 偏 之 誰 人 偏 然 漆 木 植 物 名 是

水 色 之 誰 人 偏 之 誰 人 偏 然 漆 木 植 物 古来の木の葉
結も束の松の山

年 文
下
あ
人 偏 之

ハねのこまに極おははるはつと極もまゝに
あまこの極おはるあしてあれたまのねの極
あしてこまに極おはる極おはる
おはるおはるとまゝに極おはる

け 獣将をくくおと獣をるま
はつと極

あつと極 産駒の檢校を人極をるま
はつと極

同 前 産駒の檢校を人極をるま 下鴈人極を
はつと極

はつと極 産駒の檢校を人極をるま
はつと極 産駒の檢校を人極をるま

事言
付テモ
苦カ
ラスカ

いふことあるまゝに
いふことあるまゝに
いふことあるまゝに
いふことあるまゝに

いふことあるまゝに
いふことあるまゝに
いふことあるまゝに
いふことあるまゝに

ふ あるまゝに言の字付てあるまゝに
いふことあるまゝに

いふことあるまゝに
いふことあるまゝに
いふことあるまゝに
いふことあるまゝに

者と物二句 風鳥は風極二句
いふことあるまゝに

こ 子に兒七句
いふことあるまゝに

志学ノ僧
遊行ナリト
念ハ雲水
タリヒナル
元言ナリト
ヨリ云ルナ
リトソ

西澤ちり禪家より約之又は又辰船頭人偏
お降も前もあまるとしてあまるとして
北人旋人二人交之人偏之 何のゆり
志れらる

せきごころころんかう面を強香不履

足皮よハ二句ま あつた香あつたまじり
七句あつた又足皮の字

踏皮 常季惟人偏之偏 泊る一

瀬戸の焼と一何 瀬戸の字におあま
る字を又加道の字

炭焼人偏之 北人 硯の名乃 松陰

志あびん石 是の志あびん石を
酒瀆石と云ふなり 住吉の神

吹道之名あ 名神北名水の定か
る名

透垣 是の透垣と云ふ
名

権門住吉ノ神及ヒ神垣モ水田ナリ宮松里社ホ水田ニア
ラスト海エラ守リモラ神ナレハナル
元ヨリモ我ハ浮タレホノ上波凡ハハクノレ北人神跡
西ノ海アラホカ原ノ波乃ヨリ畏ル出シ住吉ノ神トア筆直

松

四六

庚申ノイ
 本邦ニ於テハ
 龍神祀
 ナリ則
 神体ハ
 猿田彦
 ナリ
 又天王寺
 庚申ノ堂
 神体青
 面金剛童
 子ナリ又
 武ノ朝ニ出
 現セリト

神祇詞

おや子 大祓まははらひの女お良の子とらふを俗
 コのわまりてかろくご又おや子とらふ

おのり おのりまはらふを俗
 巨良の館とらふとらふ
 神祇まをわくこととらふ
 作者おぬる

庚申待 庚申ノ節一士のま
 けりてはる

非神祇詞

上巳の祓 けまらさるる事と或曰風俗通曰周
 礼ニ女巫掌テ歳時ヲ以祓ニ除ク疾病禳ハ

者潔也故於水上盥潔之也己者社也邪疾已去
 祈オホキチノカサ介社也とらふ是上巳の祓の事又論語済ニ沂
 風乎舞雩とらふと童子の祓は今の上巳の祓なりと
 りりるるにのらじよる事とけ國ノ也やらひてさるる
 られて非神祇とらふ事予案さるるまたしむらじよ
 古くもさるるにのらじよる國の俗とらふ事とらふ事と祓と
 稱する神祇はあはれとてあをわ源氏のつたひの
 みとた己の目くしむらじよる事とらふ神祇とらふ事

入教河 珠敷 けまらさるる事と或曰風俗通曰周
 礼ニ女巫掌テ歳時ヲ以祓ニ除ク疾病禳ハ

行堂 キョウダウ

瑠環 ルヱン 寶鐸をわし

愛宕神祇 アイダウ

椽エ

木の端よりくわぬ
糸を編むよーけりよるによ委也と

夜令の詞

油突アラツキ

け突の字はけりしは
垢の字より土器の事

蒲團

草履

非夜令詞

褥

けりしはトウツと云ふは
是は寝の敷き物なるの語は
あつと云ふは草履の事なり
これハ蒲團の敷き物なるなり

水邊の詞

氷柱

是は氷の柱なり
氷柱の事なり

住吉の神

此名をゆへよ
八瀬 水邊の事なり

氷水邊詞

淀

先ハ水邊の事なり
よの字より下ハ水邊

本神祇の祠をより水邊の事なり
神傳の事なり

海三三宮
其神祇
ヲ云テ水
也ナリト

合

四七

卅本ニワタル
 モリナリトシ
 依権門ニテハ
 雑トシテ其
 体ヲサシテ
 モチラ定ト
 ヲキハナリ
 異名ニテワ
 カナニツムハ
 ノモチナリト
 ヲメカハキハ
 別モノナ
 ヲシ

花燈夕十又日暮
 おりくとし
 舎利とせむるこ
 十又日の上えと
 朝野入食載等
 野菊
 高

アラホ田去年ノ古根ノ古蓬今ハ春也トヒコハニナリ
 三度セハ山田ノヒツテヒコハニナリ
 △傘何ノヤニテモ美
 野菊
 高

トカハキホト
 一ニアラス
 フ

波箱

け字ありま
 波菘菜あり

二月

浅間祭

ける付ありせん
 せん
 明神
 府中

三月

田鼠化して鶉

鶉
 鶉
 鶉

西風ハウコ
 モチナリ
 トシ

梯魚云ハ
梯蝸云ハ
如トソ只
花ノ時云
守ノ業
云モナ
云ナリト
分ハナリ
ヒト限ナ
ニモアル

カキカ
噴茶リ
千始ノ茶
小坪ニイ
兼春茶
母工ニミ
云ナリナ
味ヲ云ハ
兼ナリ
又兼ナリ
六月大暑
用ル茶ナ
只ノ新茶
混スカラ
古茶モ兼
季田ユ

是と云うはうらなとて
別のゆよゆる奥

香煙 けいこのまのまのまのま
ゆりゆりゆりゆり

花の縁 花の縁

花の縁の字強あり
第ナリ字ナリ

物杞 物杞あり

五本 カユキ
又加本
字ナリ

華愕

新茶 新茶

新茶の字ナリ古茶ハ
雜ナリ茶ナリ

比倫茶 比倫茶

比倫茶の字ナリ又字ナリ

眉作の毛 眉作の毛

アサミノ類ハテ眉作筆ニ似タリ
眉作は比倫のハキ
ホトリイニアラストン
を美人中ハ別モナリ

虎人茶 虎人茶
虎杖の字ナリ
又虎杖の字ナリ
又虎杖の字ナリ

四月

水産能三日四日五日
二日四日
あ月

鳩鳥賊 鳩鳥賊
鳥賊ハ多ク
死龍の子 死龍の子

才橋招の毛 才橋招の毛
才橋招の字ナリ
才橋招の字ナリ

五月

山田河田扇

けらる甘藷

鳥木の養美

鳥木のわらうも

けりよの紙

鶴舌

鳥木のわらうも 鶴舌と云ふ鳥木のわらうも

日本より来たつてとありといふ説あり未詳

賑給

けりよの甘藷

荊蒟

善王仙臭

善王の臭と云ふ仙臭の字 鯨正字あり又此目臭と云ふ仙臭の字ありとあり

六月

志渡寺祭

糸の子孫之志渡寺祭

椿立糸

新井

けりよの甘藷

糸良漢

梅むき

梅むき

糸良漢

沢

沢

糸良漢

荒和布

糸良漢

風蘭

秋

ワカセニハ
豆ラ月花
アヒラソト
アヒラソト
考

三ツキ
 金剛ヤ
 其根ヲ
 リツヨモ
 故有
 駒ヲツキ
 リ依テ
 必ラス
 金剛ノ
 字ハ根
 カタキヨ
 リ出ス
 ナルヘト
 七ハ月
 足ナリト
 本ヤハ根
 カヤシ
 カナヤ
 其根
 モノニガニ似タリ

弱の星漢 今使入るる
 百夜草 菊の異名

九月 先ノ兼ノ異名ナリ介ノ正漢塩中ノ露ヤノ異名トアリ八月ニ出セルモノハ冠ナキヤ

萩射 萩の字
 城南寺 城南寺

老母 北二日ハ東

戩獸 射の字

銀杏 モモ苦

安永寺 城の寺
 今ハ指遺ノ如クヨシトス

是ハ銀杏のあやまりといへり
 葉ヤバシク
 果木の
 老母
 古酒

十月

大社神事 中亥日
 八十一日

銀竹伝竹
 マリ箏間
 紫銀色
 ナリトソ
 白山映
 サニ実銀
 竹似タ
 ナルハ
 雪銀世界
 名モアル水
 柱銀竹伝
 之録竹ニツ
 訓付カ
 正トカモ
 ニモアル
 三記古来

後の季子
 銀行

少在り異名よれどるの異
 名之李太白詩よ 白雨映寒山森然似銀
 竹ニ似たり 白雨ハゆふきこきくねと申のきこき
 名ニ似たりと云ふものなりと云ふこと古来あるものなり
 たり月ひまぬりはししものなりと云ふこと古来あるものなり
 身叫 トリサキ
 けらぬけらぬ
 けらぬけらぬ

十二月

栢梨勸盃

仏名ニ用ヒ玉フナリ
 けらぬけらぬ
 よむがらぬしひたり

是述ハ本事と云ふハ四季の句の中
 事之突の遠又ハ心かの事書法おはる
 出侍り是がうらふら又四季の句の中
 一題目よりあく何れもことまじき
 多一と云ふと授けしと概其の事
 作一初字の入りより毎に便り一
 古のまじきと補ふもの

今世終るく
 △のきり

楓 赤柳うらふ大芥うらふ 鹿の洞 松境の
名あり
なり 鹿の洞の神所と鹿の洞の洞と
されどもむらうらふは多るなり

二月

園韓神祭 文内省よまらる 祇園御八講

八日拾芥 吉野の旒配 朔日吉野の坊中

抄よおらる 旒配 南風ありて世とる
の旒配とつきちとを添ふくづる又を添ふ事くまの
柳とくまの旒配とつとを添て此所が事所の人の事あり

訓読會
氏云トソ
カノ至テ
ヨミニ秘
ヨニナリ

六月三心
座敷ノ事
伝モ是上
行ヒナリ

西の人の旒 中とともいり 法良八講 社ありそ法樂よ山門より

八講と修せり と云修へし 巻二校經會 九月より十月日中まで

嵯峨権炬 尺加事のあま二丈余りの松の

おとあとも炬のりやうとてさのの農家の人
と秋の作事作ととらとら十月日の夜は

奥の福寺常樂會 十又の日は 後塔 十六日

後塔のものは法樂を常よるにありて法樂は
十又の日は常樂の盲人は會よるなり

吉祥院ニ
八講行ル
河内国ナ
リ

三月比並本又ガ表ナトニ蟬ノ声ニテナク虫アリノ是ナラニカ

むす **國宗寺ニ五勝會** 十九日 法華會とも
あり 今此會の境内よその

河と跡ありの寺或は經くる
まじりてとてやのひきまよひたり **天王寺聖賢會**

廿三日 子の四つこ
舞ふあり **水燈御忌** 廿五日 卯の辰乃辰人
廿三日 子の四つこ 舞ふありの辰とす

修武 **道明古祭** 廿五日 是日
あり 天孫の祭

廿七日 大般若ありて
辰辰とて傳せり **倉島化と魁と** 二月の節
の辰あり

月令より **魚よ** いろくの辰を御傘
ナカその物のツツあり **松むし**

多 **水口祭** 苗代と
あり 本よ舞臺のあり
わだつらるるも祭

三月

あさ **素** 上巳の日のころうの
人踏書とて 山登りありとて

師古 **務會** 廿五日 子の辰乃辰人
舞ふあり **鞆** 廿五日 卯の辰乃辰人
舞ふあり

鞆の戲 卯の辰乃辰人
舞ふあり **安樂苑** 廿五日 卯の辰乃辰人
舞ふあり

十日 西か茂上野川よの
とて村より金舞舞を
おぼせて 今更の社へ
あるを志しめのお祭の
まじりて渡りし

ワシカセウ
安キ花
花ニツメ
共ニ非
正花
共ニ正花
ナリトア

礼拝講

十二日と日山王さま及び後より山門の修らる法
又廿四日又日山十神師の修らるる
修らるるを新礼拝講と云

祇園一切經會

十
音

拾芥抄よ物より
今いそふはるし

勸学會

十月廿日大學寮の學生
あ坂本のちよあわら

ては巻經の文句を記して
清く懸るるをさうまうと云

御身拭

修験の人の修
と布帛よりして

拭きりてを布と結縁よ物と
はまらるる縁起よ物十九日と

よふて鳥

た今こを
のつりて

人のさるる
よあはるる

照のほほ

かき心よ
ほほの多き

小梅の花

壇
た
ん

雲をたふらハ多命ハ一ラ云ナルハ
草ハハ用カ取花はこノ是ナリ
一夜廿七云

カニニ鳥杜籠ト同メ只声ト足ノ爪ヲ殊ニスカニコハ常ノ如ク杜籠ハ前後爪ニツ
アリ故ニ
四ツラモテ
技トナリ
四キノ田長
ハユク
ナリ

あまの梅
三月ノ梅三月ニ咲モノニアラス是ハ江東ニ
とらふもの
テ庭梅はモノナリ又庭梅はモノ

四月

青竹簾

朔日御後よりし
四月の竹と掛らるるもの

山崎日の後

三月山崎離宮の御人年よあはるるを
ひれしと八幡とあるもの
四月の鳥

鷹の鳥

八月の鳥
入るもの

卯の花

三月の鳥

四月の鳥
鷹との二

五月

凡禁庭ニテ各事祀ナキ日ニシテ是ハ記スルニテナシ
今ヒヒヨクテアハ行ルヨテ各トス

△有無の目

凡九月村上天皇
の御國忌なり

大原ぞ

廿八日は
丹波国大原

の御まへ侍るるも九月廿八日こそ侍るを致さしむを
世道月ハ農事の時こそ侍るの人のこととて此月廿八日
神の御まへ侍るるも九月廿八日こそ侍るを致さしむを
高田ハ神の御まへ侍るるも九月廿八日こそ侍るを致さしむを
よめるよふて中の大之御と捧よけてあり
この男女よふて中の大之御と捧よけてあり

六月

一説ヒキ貴ノ扇ヲ御所ノ前ヨリ諸旦入ニ送ル
凡アタレハ海郡田ヲアケハヨクミルト常ノ扇
シシ大ナルヨシニヤ

六月會

四日法敷山傳教
大師の御忌日なり

△神今會

十日の夜戌
刻神嘉敷よ

のまへ侍るるも九月廿八日こそ侍るを致さしむを
高田ハ神の御まへ侍るるも九月廿八日こそ侍るを致さしむを

△解齋の粥

十二日の夜
四時

終るる直に齋を解くは神の御まへ侍るるも九月廿八日こそ侍るを致さしむを
高田ハ神の御まへ侍るるも九月廿八日こそ侍るを致さしむを

△祇園臨時祭

十五月初はとまゝに
根ほよふてあり

△節お

廿日今宵竹とまゝに
根ほよふてあり

△大祓

廿日百々ありくを
鷹鳥ついで

羽ふ六月の甲

腐草六月の甲の條

六月の甲の條

氷飯氷づひ飯

ひだりひだり

鷹鷹の條

七月

鷹鷹の條

七月の中七月の中

鳥鳥の條

四月四月

鷹鷹の條

鷹鷹の條

鳩鳩の條

十六箇條十六箇條

八月

△△

甲甲

八八

鷹鷹の條

鷹鷹の條

鷹鷹の條

鷹鷹の條

鷹鷹の條

鷹鷹の條

九月

△桂文お撲合

八日拾芥抄よあつりふ条

例幣

十日俵勢へも幣はよらうらふと
神祇友とく教遣の儀あり

△住吉お撲合

十一日拾芥抄よあつりふ条
室の市とて旅人習集し律と賞てゆつり

△大五古

一系合

十四日是も拾芥抄よあつりふ条
浦世の十ふよ念の合とあつりふ条

渡合新嘗合

十六日是も拾芥抄よあつりふ条
俵尼のゆつりてあつりふ条

十ちのちり

△拾文のふ

拾文のふはあつりふ条
俵尼のゆつりてあつりふ条

寺官イセハ立上ラ前日モコノ被アリ

△桂川の被

延喜式八月上旬ト定吉日ト臨河被

狹入野宮とわりの八月のころ
袂玉の燈をへ入るふ前の被り

雀蛤とあつり

九月のころの被り
月令よ委りて

射獣とあつり

是れ月令の
九月の中の被り

雲別橋

温別橋とまへ一室井よゆつり
皮を居くちりてと作玉り出り

江餅

江餅の泥と食ふあつり味泥をきあつり
は味よ味よあつり

是れ小ざり
名付りて

是れ小ざり
名付りて

昔言
温別橋
リまり
シトナリ
ワリカセ
小瀑ハ
江名
ミナリ

十月

△射場始 又自ら場敷は出陣ありて 水官解厄

十日目はハロウ... 道士の法術 △法勝寺大

祭會 十四日より十九日まで... 今八田氏の...

魚使 宇治田のありろ... 夜更行

... 山中の獣と... 大まかりて

十一月

△五節恨其室の式 中五日至上... 舞姫と...

△殿上の測醉 寅日殿上よおのて... 根源

里神樂 法社よあると里神樂と... 根源

大師講 九月天台大師の... 名噴

身立の慕ふ 名噴... 名噴

福寺心經會

十二日自十一日... 十日... 十一日... 十二日... 十三日... 十四日... 十五日... 十六日... 十七日... 十八日... 十九日... 二十日... 二十一日... 二十二日... 二十三日... 二十四日... 二十五日... 二十六日... 二十七日... 二十八日... 二十九日... 三十日... 三十一日... 三十二日... 三十三日... 三十四日... 三十五日... 三十六日... 三十七日... 三十八日... 三十九日... 四十日... 四十一日... 四十二日... 四十三日... 四十四日... 四十五日... 四十六日... 四十七日... 四十八日... 四十九日... 五十日... 五十一日... 五十二日... 五十三日... 五十四日... 五十五日... 五十六日... 五十七日... 五十八日... 五十九日... 六十日... 六十一日... 六十二日... 六十三日... 六十四日... 六十五日... 六十六日... 六十七日... 六十八日... 六十九日... 七十日... 七十一日... 七十二日... 七十三日... 七十四日... 七十五日... 七十六日... 七十七日... 七十八日... 七十九日... 八十日... 八十一日... 八十二日... 八十三日... 八十四日... 八十五日... 八十六日... 八十七日... 八十八日... 八十九日... 九十日... 九十一日... 九十二日... 九十三日... 九十四日... 九十五日... 九十六日... 九十七日... 九十八日... 九十九日... 一百日...

宿居

十六日...

霧庵下

十八日...

大隅...

初庚申

二月...

毛吹...

蛤

みお布

...

...

...

...

...

...

二月

薬師寺造花會

朔月より七日を南都薬師寺の本堂より作りむとす

初卯神樂

上卯日むらり神楽とす

叡鴻鎮座祭

初申日山の御用とす

貝よせの風

...

...

とて京都の役者ありて勤むる所の
 後樂の事ありてなる一見限る事
 柳の花 胡桃の毛 酴醾 虎杖 鶯 鶯 鶯
 茶耳 二の事ありて樂事也

四月

卯屯月夜 卯屯の白きさう
 虎杖猪 虎杖猪の社ありて
 大津賢女 大津賢女の社ありて

三日山王の柳
 大津賢女 大津賢女の社ありて
 陵王の御樂 大津賢女の社ありて
 吉宗 吉宗の社ありて
 早尾宗 早尾宗の社ありて
 風爐 風爐の社ありて
 鶏 鶏の社ありて
 矢數 矢數の社ありて
 大素宗 大素宗の社ありて
 大津賢女 大津賢女の社ありて

かきくも
石 秘 灸 けいせいの川 灸うりく
石のちりも 石の味とるもの

枝内月本丸 ニハトコノハナ 眼鳥實 ウスノイ
本名白子樹 本名白子樹

搦挑実 ユスラノミ 見 葵 ミツアフヒ けいごも 白本と

あめのをこひ あめのをこひ 玫瑰花 ハナナサヒ 於 系 ニヤコクサ 花あり

草の玉 本名白子樹
とふものあり

五月

苜蓿の根合 アヤ 五月の内 狸 子アハセ はあきより 蒸す

守宮と搦 イモリ 産 ツク はいりの血と宮女の碎月

大津新宮系 五日二井ち 竹 醉 日 チクスイニチ 十二日 今日

著 駄 政 チヤクダク 十二月とあなりの 祇園

合言符入 キツフイリ 十日 祇園を合言の 神 麴 と 製 衣 と 五日

通 鳥 丸 トウシカモ 水多ハまゆのよるまき 合 飲 本

屯桑丸灸 羊蹄屯 地床子の屯

此系蘭 本名白及 土釘の屯 毛吹きよりつややか

夏枯草より 草石替虫 千目紅 とまを

白二種あり 夏豆 大豆よりあけ

六月

蒸 こをいりてあつたこと 油照 あつたこと

あつたこと 夏の雲 月影のお 掛け網と撮

朝日 五月より六月の網と 勝勢方會 十日

今般おろし 六月會 巖山修文大師の

幸務院の屯 六月會 三日又月未より

りねく 山崎宮渡系 九日天海文如姫より

屯 蓮花會 九日蛙 尾屯 次る市

毎月の 六月中旬 小角豆系 十五日洛東吉田村

納祇園會

十五日後は

八幡地盤作

九月十五日は花の路といふ會とありはる事一は
めせ去用の中へ葉丸の鹽をり付りしる

松尾河田會

去菊の中はりしる去用上旬は
あれを十日のち菊下旬は

水合

去菊の中はりしる
撰陰陽師去

おちまは林末院中へ糸うて井の水とあること
うつ一合と是とより合るし

夏夜

昔は夏月猪助の用は氷
とぬひらるる古きよ

冷汁罐

何れより

毛虫

鱧睡蓮

赤のつより

苦苺木耳取熱癩

七月

笈渡

七日は別布留社に神寶の及こつわり會
是と出でてをさるる倍徒あり

九枝燈

口裡軍をよ供をく燈
燈臺九本とこり根原よ

黄蘗水蛇會

十二月ちいされ舟と作り火と
宇治川のちいされ舟と作り火の

林不裏御焼の鈴

十四日又日徳人
ありてあつんと

岩屋山千

目詣

十六日多動
ゆまるり

新絹糸調虫

沙臭

仏業花

本権の
新り

萩桐花

桃の亥午

時記

午の時よひしきき
午より子にある亥午子も

秋海棠

三七の忌 原え豆草の香

秋

乃七の忌

秋尾をもとのもあてて
夜よりぬぬりぬ是と秋の七葉とあり

八月

桂男

ちりく男
月の美と名

神泉苑系

朔日若女終り
とありちり

松尾社お撲目

西大寺合式

十八日より廿四
日を光る美書

と懐くとも同豊心丹
をかちきくありし

宰府天神系

廿一日より
廿四日まで

大死大明神系

北宮の洛東吉田
の地を神あり

安井系

本山狹野のまよあり
山家徳天皇と系る

毛見新若者愛

あつん
冬

紫房シメハシ いりるが 四多野カヤクキ 女メ 敵美人蕉

濱ハシ 本ユウ 縁リ 車オホバ 前コノ 子ミ 竜メツ 舌ノ 象シ あり水 本メ 賊ヨ

柳ヤナギ 芥カイ 川カハ 胡麻コメ 刈キ 蜀黍タワ 南キ 蜜ミ 黍ヒ

九月

東大寺八幡祭 二日舞 後の雛 五條

天神祭 十日又祭 南御古祭 同日結六六

六孫王祭 十日東古の山 久世祭 十日

西の雲西の雲よりの子 天天 王王 念念 佛佛 會會 十五日

夢窓忌 晦日 田田 のの 落落 水水

菊キク 虎スライ 無無 花花 果果 摘摘 ナラ

無患子 モクゲンシ 岩蓮イハ 公公 多多 小小 のの 花花 白白

粉コ のの 花花 若ワカ 瓜カ 菊キク 其シ 葉エ のの 花花 美ミ 女メ のの 実実

青豆

楓菌 ワラヒクケ

是とらうら

地草 ヒメタケ

猪草 シハタケ

洗紙草

土菌 ツチタケ

女佳 メシタケ

十月

雉入大水為蜃 トハタケハ大蛤あり

と月令注よる

虹霓 カサレテ

不見

是月令

虫供養

十一日二日

出虫 梅尾

社祭

下子日或午丹波

一向宗御衣

菜飯

鱧鱻 カサノ 是ハ俗字なり本名

櫃の花 カサ

十一月

不食をいふのむ フキヤウクハ

ともよ書の

ちぢり 木の

新物まじり ニ井モ

上卯日出るを云ふ大社あり

新穀と用るなり 送よまじりをも信託人

天皇古の祖神祭 六

往來の人とてめて儀と丸出 往來の人とてめて

家 シモヤケ

石花 カキ

十二月

時宗家末御時

此等のあり毎日
滅灯とありあり

御清被

此日吉田御門裡よ
まつりてありあり

か子
御清被

年の終り後尼と世尊寺又
寺院へも修りありあり

年貢納
修りあり

節料物

正月は月入るまじお茶穀物
塩酒ホのりそと束のりありあり

寒造酒の

蠟梅
も黄
ありあり

六八

抄のりしとあましと河津と取用

しと真なるしとまじりて書し

修りし終り又此通よ河津りん人

かうぐんそ補しと終りしとまじりて

寛延貳年
己孟春穀旦

洛下書林

新井彌兵衛版
田中庄兵衛求板

政

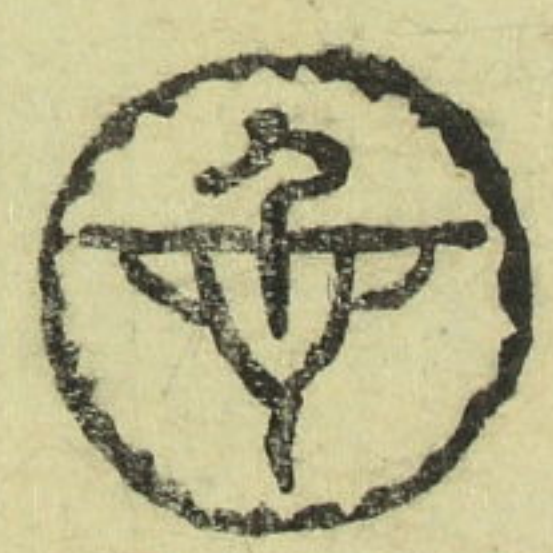
天壤造化人倫妙木多歎之救をせし
是の合をさる抄し南を北東を西か
川の流るる次まふ部のみは流肉ふ
葉ふく膚るるりく文白くならんも
骨まら毒し力弱くなるや一鄙のみ
ほのふ玉物葉こと力たぐ南
まねる文をくばるあららるしと

古人も毎夜遊小亭...
ぬと...
宗...
あ...
聖...
入...

寛入の二己如月

而嘆堂

練石



御金書云

難ノ字下

大...
父...
モ...
式...



理集

